

セーヌ河畔

街並みが溶けこむ川

小松 豊

KOMATSU Yutaka
株式会社建設技術研究所 / 環境部 / 次長



セーヌ川は、日本の利根川と比べれば、流域の広さで5倍弱(流域面積79,000km²)、流路の長さでは2倍強(流路延長700km)の大河である。

パリ市内を流れるセーヌ川は、シテ島とサン・ルイ島と呼ばれる中州をはさんで2つに分かれ、大きく蛇行する。

ノートルダム寺院の上流からエッフェル塔のあたりまでの河岸を含めた約5kmの区間が世界遺産として登録されている。

河川の勾配は1/15,000程度と緩やかで、川の雰囲気はゆったりとしている。往来する船や橋、人々が行きかうにぎやかさは、日本の隅田川に似ているとも言える。

パリはシテ島を中心に発達したと言われ、パリの成長とともに、セーヌ川沿いにノートルダム寺院や王宮が数多くつくられた。現在でも美術館に生まれ変わるなどで、古い建物が多数残されている。

セーヌ川は何故か川の代表選手のように言われることが多いが、川としては何の変哲もない。セーヌ川が何故良いかといえば、多分統一された構造の美しい橋や、川から見える素晴らしい建物のせいであろう。

また、川沿いの建物は高さ制限によって高さが保たれているため、全体としての調和がとれている。異質な様式の建造物がないのも景観向上に役立っている。

セーヌ川の建物群としては右岸にはルーヴル美術館、チュイルリー公園、コンコルド広場、シャイヨー宮等がある。左岸にはオルセー美術館、エッフェル塔等があり、シテ島にはノートルダム寺院がある。どれも歴史的、世界的にも有名なものばかりである。

セーヌ川に架かる橋の全ての橋梁の構造は、橋下で支える構造である。このため、この型が川沿いの街並みを遮ることなく、特に橋の上から街を眺めることを可能としている。

セーヌ川そのものについてみると、高水敷は散策道として利用され、樹木の周辺以外は石張である。樹木は連続して植えられているわけではないが、マロニエが多く、そこは心地よい空間となっている。

セーヌ川には川の眺望を楽しめるようなレストランはなく、全般的に散策する人も多いとは言えない。川の水も濁っており、見た目にはきれいとは言えない。しかしな



写真3 - 街並みが100年以上もほとんど変わらないサン・ミシェル橋周辺 奥はノートルダム寺院(左下:サン・ミシェル橋付近を描いた1864年の絵画)

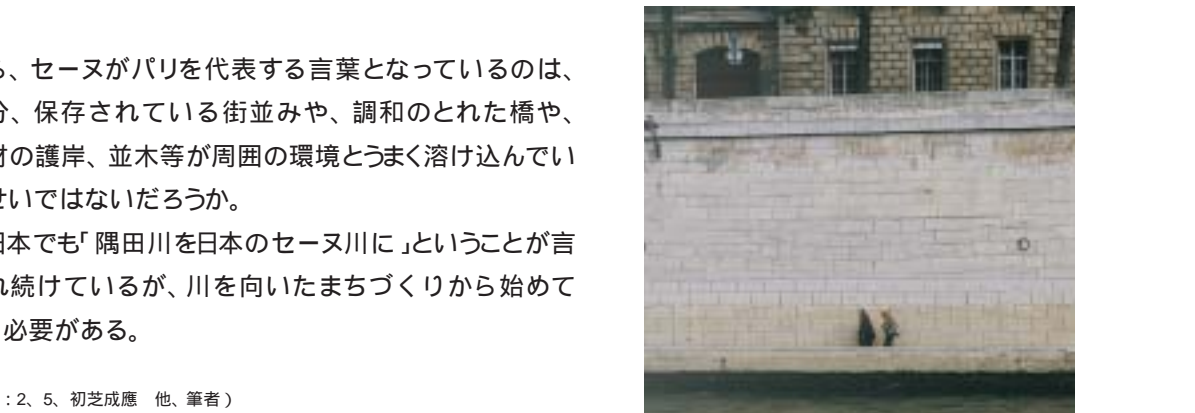


写真5 - ノートルダム近くのセーヌ川 散歩する人も少なく、道路からは相当の段差がある

がら、セーヌがパリを代表する言葉となっているのは、多分、保存されている街並みや、調和のとれた橋や、石材の護岸、並木等が周囲の環境とうまく溶け込んでいけるせいではないだろうか。

日本でも「隅田川を日本のセーヌ川に」ということが言われ続けているが、川を向いたまちづくりから始めて行く必要がある。

(写真:2、5、初芝成應 他、筆者)

参考文献
1)朝日新聞社:週刊朝日百科 世界100都市ここに行きたい 第2号 パリ
2)株式会社講談社:週刊ユネスコ世界遺産 第4号 パリのセーヌ河岸1
3)株式会社講談社:週刊ユネスコ世界遺産 第11号 パリのセーヌ河岸2



写真1 - 川沿いの建物は高さが制限されている



写真2 - パリで最初の鉄製の橋、芸術橋と呼ばれる美しい橋



写真4 - 直立の護岸であるが、石積みのためか威圧感が少ない



写真6 - 古い建物と橋と緑がありなす心地良い空間